

『太平記』に描き出された武士像

―「忠」と「孝」を中心に―

于 君

(受理日二〇一五年十月五日)

一、はじめに

筆者は、日本における「武士像」の成立を明らかにする研究の一環として、中世の軍記物語、特に戦闘場面における武士関連の記述に着目し、「描き出された武士像」について考えることを課題としている。本稿では、『太平記』⁽¹⁾をとりあげ、その中に描き出された武士像の一端を明らかにすることを目的とする⁽²⁾。

『太平記』中の武士に関する記述を最も特徴づけるのは、言うまでもなく、「忠」または「忠」に関わる言葉が多出することである⁽³⁾。なかでも、最大の「忠臣」として描かれ人々に馴染みがあるのは、楠木正成であり、子の正行も「忠孝」を代表する武士として、長い間人々の脳裏に深く根付いてきた。こうした正成・正行像の定着の理由としては、『太平記』中の正成・正行関連の記述に起因するほか、戦前までの『太平記』受容史が深く関わってきたと言えるであろう。以下、『太平記』受容史における正成・正行像の変遷を、先行研究によって示しておこう。

『太平記』において、楠木正成は南朝の忠臣として描かれたにもかかわらず、足利將軍の支配下にあった室町期には、彼は逆賊だとされていた。歴史的に、本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員・中村春作(主任指導教員)、竹村信治、西原大輔、西村大志

正成らが忠臣として称揚されるようになったのは、朱子学的大義名分論によって南朝を正統とした徳川光圀『大日本史』以降のことである。その後、『太平記』を南朝忠臣の物語として読みとる『太平記』観による「忠臣」正成像・「忠孝」正行像は、頼山陽の『日本外史』や、「忠孝一本」「君臣一体」を教義とした後期水戸学派などにも受け継がれることとなったのである⁽⁴⁾。近代に入ると、特に明治十年代から太平洋戦争敗戦に至るまでの時期、『太平記』は当時の時代背景・政治思潮との関わりの中で特定の読まれ方がなされるようになり、南朝側の武士、中でも特に正成・正行父子を題材とした関連教材が、国語・修身・歴史・唱歌の各教材に至るまで幅広く採用されることとなった。正成は「忠臣」の、正行は「忠孝」の鑑として、「忠君愛国」や「七生報国」の模範とまでクローズアップされるようになったのである。戦前・戦中において、正成・正行父子は、「君臣一体」「忠孝一致」観念につながるかっこうの教材となり、国民的自覚を促す一大エピソードと化したのである。楠木正成・正行父子が、こうした「忠君愛国」「忠孝一致」のレッテルを貼られて出てきた経緯、公教育に登場する楠木父子像が、『太平記』の原像をいかに歪め、「忠君愛国」の道德教育に奉仕させられてきたかについては、明治以降の学校教育を中心に検証した、中村格の研究⁽⁵⁾に詳しい。

以上のような『太平記』受容史の中で、われわれの『太平記』理解、楠木正成・正行像も形成されてきたことをまず確認しておきたい。

そうした『太平記』受容史への批判的視点の必要性に加えて、『太平記』の作者が官方か武家方かが議論の対象となっている今日、『太平記』全体を貫

く思想的根幹として『貞観政要』があったことの重要性を指摘するのが八木聖弥である。『貞観政要』の君臣論理（君臣合体・諫臣の重要性）による場合、後醍醐天皇方において臣と呼び得るのは、万里小路藤房と楠木正成の二人しかない⁽⁶⁾と八木は主張し、『太平記』中の君臣関係の見直しを説いている⁽⁶⁾。また、森田貴之は、万里小路宣房と万里小路藤房に見られる二つの対立する君臣観に着目し、『太平記』テキストの両義性（文脈上の批判と文面上の肯定）を指摘しつつ、物語全体の文脈においては、揺るぎのない「忠臣」はやはり藤房一人だと述べている⁽⁷⁾。両者の問題意識は異なるが、南朝側における天皇（後醍醐天皇）―臣という「君臣関係」において、『太平記』中の「忠臣」像をとらえる点においては同様である。このように、「忠臣」というキーワードで『太平記』中の武士（公卿も含め）について言及する近年の研究を見ても、南朝を主軸にして捉える傾向が見られるのが事実であるが、『太平記』中には、南朝を軸とした「君臣関係」以外にも、北朝側の「君臣関係」、また武士間の「君臣関係」における「忠」の表現を見いだすことができるのである。

本稿では、戦前・戦中期に偏った視点でとり上げられた楠木父子ら南朝側の武士に限らず、また限定的な「君臣関係」の枠組にもとられず、数十年にわたる南北朝の内乱を主題とした『太平記』に描かれたさまざまな武士における、「忠」、「孝」に関わる具体的な記述に着目して、これまであまり問題視されなかった武士の姿についても考えることとしたい。

筆者はすでに、『平家物語』における武士の「忠」と「孝」について考察したことがある⁽⁸⁾。『太平記』中の武士像の独自性を確認し対照させるため、まずは先行する軍記物語『平家物語』⁽⁹⁾をとりあげ、「忠」と「孝」が出てくる文脈に着目し、そこに表出された武士の姿を述べておきたい⁽¹⁰⁾。

二、『平家物語』に描き出された「忠臣孝子」像 ―平重盛を中心に―

『平家物語』の中で、明確に「孝」と「忠」という言葉が出てくるのは、平重盛が登場する場面においてである。具体的に、「殿下乗合」事件後と、「鹿谷」平家打倒陰謀事件が発覚してからの二場面において、息子の平重盛を始め、及び父平清盛を諫める重盛の話の中で「孝」と「忠」が出現する。以下、重盛の語りに現れる「孝」と「忠」のあり方を端的に示す場面をもとに考察する。

(二―一) 平重盛の語りにおける「孝」

資盛が摂政殿のおでましに際し無礼を致したため馬から落とされたのを、平清盛が片田舎の武士を集め摂政殿一行に恥をかかせた。これを知った重盛が、参加した武士たちと息子を厳しく咎める場面に、次のような「不孝」についての言及がある。

か様に尾籠を現じて入道の悪名をたつ。不孝のいたり、汝独りにあり。⁽¹¹⁾

「入道の悪名をたつ」ことが、「不孝」であるとするのは、「家」の父に良い評判をもたらすことが「孝」であるということを目指すだろう。

もう一例を挙げよう。父清盛の悪行を見て平家の先を憂え、熊野へ参詣した時、本宮証誠殿の前で一晩中神に訴えた重盛の話の一部である。

そのふるまひをみるに、一期の栄花猶あやふし。枝葉連続して、親を顕し、名を揚げん事かたし。此時に当つて、重盛いやしうも思へり。なまじひに列して、世に浮沈せん事、敢へて良臣孝子の法にあらず。⁽¹²⁾

重盛の嘆きにある「良臣孝子」という言葉に注目し、「孝子」の意味について考えたい。重盛の言い分の中の「親を顕し、名を揚げん事」は、『平家物語』の校註・訳者市古貞次による注釈にもあるように、「身ヲ立テ道ヲ行ヒ、名ヲ後世ニ揚ゲ、以テ父母ヲ顕スハ孝ノ終ナリ」（古文孝経・開宗明誼章）という儒教倫理の「孝」につながっている⁽¹³⁾。要するに、ここでは、重盛にとつての「孝」は、「名を揚げて、父母を顕彰する」ものとして描かれているのである。「子孫を生む」（子孫繁栄）という儒教倫理にある「孝」の内容の一つ⁽¹⁴⁾から考えると、重盛にとつての「孝」の対象は、父清盛を含めた平家一門全体の祖先に向けられたものであったと考えられるだろう。

(二―二) 平重盛の語りにおける「忠」と「孝」

平重盛における「忠」と「孝」は、専制政治を目指す主君の後白河院と、横暴な独裁者である父清盛との軋轢の狭間に立った際の、彼の苦しい選択の場面で先鋭化して描き出される。

鹿谷における平家打倒計画が発覚した後、後白河院を軟禁しようとした清

盛に対し、重盛が儒教と仏教、古今東西の知識を用いて長々と諫言した話の中に、「君と臣とならざるに、親疎わくかたなし。道理と癖事をならべんに、急でか道理につかざるべき」⁽¹⁵⁾とある。『平家物語』の諸本によって、多少記述の相違が見られるが、たとえば、延慶本では、「君与臣ヲ准ルニ親疎ヲワカズ君二仕へ奉ルハ忠臣ノ法也」⁽¹⁶⁾とある。つまり、重盛が堅持した論理として、臣は君（後白河院）に従うべしとする、「忠臣」の道理がある⁽¹⁷⁾。しかし、後白河院に対し「忠臣」の立場を取ろうとすれば、父清盛に対し孝子を貫くことが出来なくなるのである。

悲しき哉君の御ために、奉公の忠をいたさんとすれば、迷廬八万の頂より猶たかき、父の恩忽ちに忘れんとす。痛ましき哉不孝の罪をのがれんと思へば、君の御ために既に不忠の逆臣となりぬべし。進退惟谷れり。是非いかにも弁へがたし。申しうくるところ詮はただ重盛が頸を召され候へ。さ候はば、院中をも守護し参らすべからず、院参の御供をも仕るべからず。⁽¹⁸⁾

後白河院に対する「忠」と、父への「孝」のどちらを選ぶか、困り果てる重盛の様子がここには描かれている。そして彼が見出した解決法は、死をもつて、「忠」と「孝」の両立を図ろうとすることであった。これが、重盛が父を諫める論理に見られる「忠」と「孝」の在り方である。しかし一方、後に重盛がとった行動を見ると、「忠」と「孝」の関係が微妙に変わってくることに注意を払う必要があるだろう。

重盛が存命の間は、清盛の法皇への軟禁を止めることができたので、法皇への「忠」を一旦果たしたと言える。しかし、彼の死後、わずか三ヶ月後に、清盛は法皇への幽閉を強行する。重盛も生前に、自分の力ではどうしても父の悪行を止めることが出来ないと察知したからこそ、現世を諦観してただ一族と自分の救済を神仏に委ねるのである。主君後白河院に対する「忠」を果たすため、軍を集め後白河院を守る、又は父清盛を拘束するのが得策であるが、重盛はそうした行動をとらなかつた。すなわち物語のストーリー展開から見ると、あくまでも父への「孝」を貫く重盛の姿が、そこには鮮明に描かれていたとも言えるのである。しかしそれは反面、後白河院に対する不徹底な「忠」とならざるをえない。

こうした重盛の父清盛に対する態度について、道端良秀は、儒教倫理の「孝」の教えに基づき、重盛の父清盛に対する「孝」は父への絶対的服従としてのものだと思えていた⁽¹⁹⁾。しかし、父の武装軍団に加わって、後白河院を拘束しなかつた重盛の選択から見ると、その行為は父への絶対的服従とは言い難い。「父をいさめ申されつる詞にしたがひ、我身に勢のつくかつかぬかの程をも知り、又父子軍をせんとにはあらねども、かうして入道相国の、謀反の心をもやややらげ給ふとの策なり」⁽²⁰⁾とする『平家物語』の記述から、長々と父を諫めた重盛の真意が、父と戦をしようというのではなく、父の後白河法皇への幽閉を阻止する「策」であつたことが分かる。さらに、「烽火之沙汰」の章に「国に諫むる臣あれば、其国必ずやすく、家に諫むる子あれば、其家必ずただし」と、『孝経』諫争章⁽²¹⁾の文を引用し、重盛を「諫むる子」⁽²²⁾をもって孝子としているのである。すなわち、重盛に体现されたのは、「諫言」という行為につながる「孝」であつた。

（二）三、まとめ

前文で考察したように、後の重盛の行動には父への「孝」の優位も見られたが、父を諫める場面において、言葉尽くして「不忠」に走る父清盛を諫め、子孫代々の繁栄を願おうとする「孝」の立場と、主君後白河院に逆らわず、臣としての自分を全うする「忠」の立場の両方をとる。「忠」と「孝」のどちらも捨てられない彼の苦悩が、深く人々の心を打ち、当時の人々に「忠臣孝子」として高く評価されたのである。

平重盛に体现された「孝」と「忠」は諫言の場においてであり、また、『平家物語』において、平重盛以外の場面ではほとんど「忠」が語られる場面はない。このことは、十二、十三世紀における「忠」のありかたを考える上で示唆的だろう。

『平家物語』とほぼ同時代に成立した『十訓抄』も、賀茂祭の見物場面での重盛の振舞を通して、彼を「情深し」として描く。一方、第六「可存忠直事」には、「忠」を主題とした説話が多く配列されている。その冒頭に「ひとへに君に随ひ奉る、忠にあらず。ひとへに親に随ふ、孝にあらず。あらそふべき時あらそひ、随ふべき時随ふ、これを忠とす、これを孝とす……：悪しからむことをば、必ずいさむべき」⁽²³⁾とあり、『平家物語』の重盛に体现されたのと同様、「忠」と「孝」は「諫言」と密接に関わって語られている。内

田澤子は論文「『十訓抄』の忠義―第六の考察から―」⁽²⁴⁾の中で、この章に収められた主従関係における忠義を記した説話の具体的検討を通して、『十訓抄』は規範となる「忠義」が、主に天皇を対象としており、しかも戦の場面と関わる「忠義」のありかたが意図的に排斥されているだろうと述べた上で、全体として、「出家」という方法に代表されるような、前時代的な、(貴族的)とも言える色合いを強く現している指摘している。確かに、重盛も『平家物語』の中で、父と主君の間に進退兩難の立場に置かれた際、武力で問題を解決するのではなく、救いの道として「出家」を選んだのであった。「孝」と「忠」が相剋する場面で、武士でもある重盛のこの対応の仕方(諫言↓出家)は、『十訓抄』にも示される(貴族的)な側面を持っていたと言えるだろう。

三、『太平記』に描き出されたさまざまな「忠」と「孝」

以上述べてきたように、『平家物語』の「忠臣孝子」像は、(貴族的)な氣質をも有する武士平重盛一人の行動において、特徴的に描き出されたと言いうことができるであろう。

それに比較すると、『太平記』においては、「忠」と「孝」は、さまざまな場面に多く表出され、そこに語り出された武士の姿も多種多様であるのが事実である。「忠」と「孝」が平重盛の場面において、対立する形で現れたのに対し、『太平記』中の武士における「忠」と「孝」はどのような現れ方をしていたのか。まず、よく知られる「忠孝」の武士として、楠木正成・正行父子をとり上げて考察する。

周知のように、『太平記』中、もっとも好意的に描かれるのは楠木正成・正行父子である。『太平記』における楠木正成・正行父子の物語の役割について、北条高時・足利尊氏・新田義貞ら源平の「武臣」の範疇に入らない、「あやしき民」身分としての楠木正成らの物語は、天皇と武臣の二極関係で構成される天皇制以外に、「天皇と民」で構成されるもう一つの天皇制を作り出し、そして近世・近代へと引き継がれたとする、兵藤裕己の説がある。すなわち、楠木正成らが、『太平記』の構想(源平の「武臣」交替史)の枠組みをとびこえて、直接に天皇に「忠」「忠孝」を尽くした物語は、「忠臣」正成・「忠孝」正行のメタファーとして、後世の歴史や政治に広く影響したと、兵藤は論じているのである⁽²⁵⁾。

言うまでもなく、楠木正成・正行に代表される「忠孝」のモチーフ形成の起源は、『太平記』の楠木正成・正行を語る言葉の中に求められなければならない。以下、まずは楠木正成・正行父子について、いかなる文脈の中で、「忠」また「忠孝」が語られたかについて再確認し、その上で、さらに楠木父子以外の武士における「忠」「忠孝」の表出のされかたについて考えてみたい。

・楠木正成

『太平記』では、その神秘的な登場ぶりに加え、一連の奇略を以て敵を翻弄する楠木正成について、まず「智略・智謀」に富んだ武士として描き出す。「忠」という言葉で正成が語られるのは、その自害に至る場面においてである。後醍醐天皇の建武政権が瓦解し、世は再び内乱状態になった。足利尊氏の上洛に備え、一旦京都から撤退するのを進言して受け入れられなかった正成は、死を覚悟して兵庫に下る前、桜井で嫡子正行に対し、

正成すでに討死すと聞きなば、天下はかならず將軍の代に成りぬと心うべし。しかりといへども、一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失つて降人に出づる事あるべからず。⁽²⁶⁾

と、有名な教訓を残す。当初、同じく後醍醐天皇側に立った尊氏は今や既に朝敵となり、「義を重んずる者は少なく、利に移る人は多ければ」⁽²⁷⁾という「世の末の風俗」の中で、命や利益のために「主」を変えざる武士が多いうる中、一貫して後醍醐天皇を支えた正成は、息子正行にも引き続き同じ南朝側の主君への「忠烈」を忘れないことを要求する。さらに、正成が湊川の合戦で、弟正季と刺し違えて自害した後、『太平記』は正成を、次のように絶賛している。

そもそも元弘よりこのかた、かたじけなくもこの君に憑まれまゐらせて、忠を致し功にほこる者幾千万ぞや。しかれどもこの乱また出で来て後、仁を知らぬ者は朝恩を捨てて敵に属し、勇みなき者はいやくも死を免れんとて刑戮にあひ、智なき者は時の変を弁せずして道に違ふ事のみ有りしに、智・仁・勇の三徳を兼ねて、死を善道に守るは、いにしへより今に至るまで、正成ほどの者はいまだ無かりつるに、兄弟ともに自害しけるこそ、聖

主ふたたび国を失つて、逆臣よこしまに威を振るふべき、その前表のしるしなれ。⁽²⁸⁾

このように、元弘の乱から今に至るまでの歴史を回想し、その中にあるさまざまな武士の様子を通覧した上で、「逆臣」となった尊氏を批判する一方、「智・仁・勇の三徳」を兼ねた理想像として、古今未曾有の「忠臣」として、『太平記』は正成を描き出すのである。

・楠木正行

一方、子の楠木正行は父の遺言に従い、引き続き南朝に仕える「臣」として、また正成の「子」として、君臣関係と父子関係の両方に立場を置く。では、こうした正行において、「忠」と「孝」はいかに語られたのか。

四条畷の合戦に入る前、正行が最後の合戦になることを覚悟し、吉野の皇居へ参内して、後村上天皇に拝謁して語る話の中に、

有待の身思ふにまかせぬ習ひにて、病に犯され早世つかまつる事候ひなば、ただ君の御ためには不忠の身となり、父のためには不孝の子となるべきにて候ふあひだ、今度師直・師泰に懸け合ひ、身命を尽し合戦つかまつて…⁽²⁹⁾

とある。師直・師泰を迎え撃とうとする自分の決意を表明する正行が用いる論理は、戦わずに死ぬ事は、帝には「不忠」、父には「不孝」となるということである。では、彼はいかにして帝への「忠」と父への「孝」を果たすのか。それは、かつて正行の母が正行を論じた場面にも見られるように、

故判官が兵庫へ向ひし時、なんぢを桜井の宿より返し留めし事は、全く迹を弔はれんためにあらず。腹を切れとて残し置きしにもあらず…今一度軍を起し、御敵を滅ぼして、君を御代にも立てまゐらせよ…⁽³⁰⁾

という父の遺言を果たすことである。すなわち、朝敵を亡ぼし、尊氏に敗れて比叡山へ難を避けた後醍醐天皇を再び位に付けることが、「忠」とされるのである。後醍醐天皇没後も、正行は父正成同様、一貫して南朝側に仕え、

二代の帝、後村上天皇にも「忠」を果たそうとする様子が描かれる。と同時に、母の教訓を受け入れて父の後を追って自害するのを止め、父の遺言を守って帝に「忠」を尽くしたことが、父への「第一の孝行」（巻第十六「正成兵庫に下向の事」）と評価されるのである。

以上述べてきたように、物語に登場して以来、一貫して南朝を支え、二代にわたり天皇に「忠」を果たした楠木正成・正行、父の遺志を継いで南朝に「忠」を果たすことで父への「孝」を尽くした正行の姿が、『太平記』には鮮明に描き出されている。

では、その他の武士たちにおいて、「忠」と「孝」はどう表出されているのであろうか。

・塩飽入道聖遠

『太平記』の巻第十の後半は、新田義貞軍に追い詰められて滅亡していく北条一門の話で構成され、そこには、討死や自害した北条側の武士の姿が多く描かれている。武士がどのような心情をもって死んでいったのかについて、まずは塩飽入道聖遠が自害する場面を例に見てみよう。

塩飽新左近入道聖遠は、嫡子三郎左衛門忠頼を呼び、「諸方の攻め口ことごとく破れ、御一門たち大略腹切らせたまふと聞えければ、入道も守殿に先立ちまゐらせて、その忠義を知られたてまつらんと思ふなり…⁽³¹⁾

「武運の傾くを見て、時の難を通れんがために」遁世する者が多かった時代⁽³²⁾において、出家もせず、また裏切りや向背が多く描かれる『太平記』の中で、元の主を変えて新しい主人に従うのでもなく、運命を悟った後もなお元の主人北条高時側に立って自害し、二心無き「忠義」を示す聖遠の姿がここには描かれている。

・小山田太郎高家

湊川合戦において、窮地から新田義貞を救うために討死した小山田太郎高家のエピソード、特に、彼が義貞のために討死した理由は、次のように記述されている。

義貞大きに恥ぢしめる気色にて、「高家が法を犯す事は、戦ひのために罪を忘れたるべし。いかさま士卒先んじて疲れたるは大將の恥なり。勇士をば失ふべからず、法をば乱る事なかれ」とて、田の主には小袖二重ね与へて、高家には兵糧十石相添へて色代してぞ帰されける。高家この情けを感じて忠義いよいよ心に染みければ、この時大將の命に替はり、たちまちに討死をばしたるなり。⁽³³⁾

義貞は、青麦を刈つて軍規を犯した小山田に対し、罰せず、却つて兵糧を与え、彼に對する「忠義」心が高まったが故に、義貞の命の代りに討死した小山田の姿がここには描かれているのである。

わざわざこの一章を設けて、小山田高家討死の理由を語る『太平記』の意図は、その最後の一句、「昔より今に至るまで、さすがに侍たる程の者は、利を思はず威にも恐れず、ただその大將によつて身を捨て命に替はるものなり。今武將たる人、これを慎んでこれを思はざらんや」(巻第十六「小山田太郎高家青麦を刈る事」)から明らかになる。従来武士たる者の理想は、「利を考えず、ひたすら上の大將の為に命を捨てる」者だとされていたが、最近ではそういう武士が少ない。それ故、「義を金石に比」し、「命を塵芥・鴻毛よりも軽くする」少数の武士たちの側に関心があつた『太平記』⁽³⁴⁾において、他の武士たちへの戒めとして、小山田高家が武士として取るべき行動をとり、大將を救う為に我が命を顧みなかつたことが、「忠義」心ある武士として特筆されたのである。

・石塔右馬頭頼房

足利直義をめぐる幕府の内訌をねらつて、吉野側は新田の残党に決起を促す。もともと尊氏幕府側であつた石塔四郎入道は、新田側に加担して翌日の合戦で將軍尊氏を討とうとする自分の計画を息子の右馬頭頼房に告白する。しかし、頼房はひどく機嫌を損ね、

「弓矢の道」一心あるを以つて恥とす。人の事は知らず、それがしにおいて
は將軍に深く頼まれまゐらせたる身にて候へば、後矢射て名を後代に失は
んとは、えこそ申すまじけれ。兄弟・父子の合戦いにしへより今に至るま

で無き事にて候はず。いかさま三浦介・葦名判官・隠謀の事を將軍に告げ
申さずは、大なる不忠なるべし。父子の恩義すでに絶え候ひぬる上は、今
生の見參はこれを限りとおぼしめし候へ」⁽³⁵⁾

と言ひ、腹を立てて將軍の陣へ帰つたことが記述されている。頼房がここで用いたのは「弓矢の道」一心あるを以つて恥とす」る武士の論理である。頼りにされていた身で將軍に後ろ矢を到底射かけられない頼房は、兄弟・父子との合戦に参加する覚悟を以て発言する。棒線部から逆に考えると、頼房がこれから取ろうとするのは、父たちの陰謀を將軍尊氏に告げ、父との戦になつても將軍の味方をする、という主君尊氏に對する二心無き「忠」の立場ということになるだろう。

・細川相模守清氏

足利幕府内部の混乱を描いた第三部では、佐々木道譽の無礼に立腹した山名師氏が、吉野殿と示し合せて挙兵し、洛中で戦つて義詮らを京都から追い出す。後光嚴帝ら一行が義詮に擁護され都を落ちていく一場面は、次のようにある。

しばしの御逗留叶はで、主上また腰輿に召されたれども、昇きまゐらすべ
き駕輿丁も皆逃げ失せて一人も無ければ、細川相模守清氏、馬より飛んで
下り徒立ちになり、鎧の上に主上を負ひまゐらせて、塩津の山をぞ越えら
れる。子推が股の肉を切り、趙盾が車の片輪をたすけしも、この忠には
過ぎじとぞ見えし。⁽³⁶⁾

帝を担ぐ人が誰一人いない中、細川が帝を背負つて塩津山を越えた行為を、『太平記』は故事を引き、股の肉を切つて重耳を救う、また自分の臂で趙盾の車を支える行為にも勝る「忠」だと評価する。落魄の後光嚴帝の遷幸の中で、天皇の徒歩の辛苦を思い、天皇を背負つて山を越えた行為が、ここでは、この上ない「忠」として語られたのである。

・本間源内兵衛資忠

一方、『太平記』中には、「忠」ほど多くは出現しないが、「孝」で語られ

る武士の姿もある。その一例を、楠木正行以外の例でも示しておこう。

赤坂合戦において、北条側の関東軍にいる人見と本間二人は、いち早く幕府の滅亡を予見し、単独行動を起こして覚悟の上の壮烈な討死を遂げる。その中で、本間の息子である源内兵衛資忠が父の首を見て、父の仇討ちに出ようとした時、彼を留める聖の話の中に、

父子ともに討死したまひなば、たれかその跡を継ぎ、たれかその恩賞をかうむるべき。子孫無窮に榮ゆるを以つて、父祖の孝行をあらはす道とは申すなり……⁽³⁷⁾

とある。この聖の言葉に示される「孝行」の論理は、命を保って、父の討死から得た恩賞を受けて子孫の繁栄をはかることである。しかし、それに対し資忠はどのような行動をとったのだろうか。

人の親の子をおもふあはれみ、心の闇に迷ふならひにて候ふあひだ、ともに討死せん事を悲しみて、われに知らせずして、ただ一人討死しけるにて候ふ。相伴ふ者無くて、中有の途に迷ふらん、さこそ思ひやられ候へば、同じく討死つかまつて、無き後まで父に孝道を尽し候はばやと存じて、ただ一騎相向つて候ふなり。城の大将に、この由を申され候ひて、木戸を開かれ候へ。父が討死の所にて、同じく命を止めて、その望みを達し候はん」と慇懃に事を請ひ、涙に咽んでぞ立つたりける。⁽³⁸⁾

上の引用は、父が討死した赤坂城の近くに来て、城中の武士たちに投げかけた資忠本人の言葉である。子への愛情のため、子に知らせずに討死した父に対する「孝道」を尽くすため、あの世の父の道連れとして、父と同じ場所で討死することを願う資忠の姿が、ここには描かれている。これは、前文の聖の「孝行」の論理とは異なる資忠の行動である。そうした資忠に、城中の武士たちも「その志孝行にして、相向ふところやさしくあはれなるを感じて」という態度を示す。また、討死した資忠に対し、『太平記』は共感をこめて、「ためしなき忠孝の勇士にて、家のために栄名あり」と、死後の父を追って討死したのは、父への「孝」となる一方、北条幕府への「忠」でもあると記すのである。

・まとめ

以上、『太平記』中さまざまな場面で語られた武士の「忠」と「孝」のあり方を提示してきた。その中身をまとめれば、以下のようなになるだろう。

楠木正成・正行父子の場合に見られる、これまでも多く論じられてきた、南朝の天皇とその臣下という「君臣関係」における「忠」、塩飽入道聖遠・小山田太郎高家・石塔右馬頭頼房らとそれぞれの「主」に見られる武士間の主従関係に表出される「忠」（忠義）、さらに、北朝天皇と細川清氏の君臣関係における「忠」、このように「忠」の対象はさまざまであり、そして「忠」は、南朝天皇に終始仕えて「臣」としての節を全うする行動の中、各々の「主」に二心無きことを示すために伴われる討死・自害、北朝天皇の辛苦を思いやる心から起った行為など、実に多様な形で表出されるのである。

一方、孝に関して言えば、父の遺言と母の教訓を守り、長い年月をかけて父の遺志を貫いた楠木正行の「孝」と、子孫の繁栄をも背後にし、亡き父のあの世の道連れになろうと討死した資忠の「孝」の、二つのあり方が『太平記』には表わされている。

そしてこの正行と資忠に見られる二つの異なる「孝」のあり方が、ともに「忠」と連動して表出されていることにも注目すべきであろう。正行に見られる「孝」は、父の遺志を継いで南朝側二代の天皇に「忠」を果たしたことが前提とされる。一方、無き父のあの世の「孝行」を尽くすため討死した資忠に対し、『太平記』は、彼を「ためしなき忠孝の勇士」と記している。本稿の前半で示した『平家物語』における平重盛の場合、父と主君の対立という背景の下、「孝」と「忠」は二律背反する形で情感を込めて語り出されていた。しかし、『太平記』における正行と資忠の二場面には、「孝」と「忠」の対立といったモチーフは見いだせない。『太平記』において、『平家物語』とは異なる武士の「孝」と「忠」のつながり、連続が表出されているとも言えるだろう⁽³⁹⁾。

四、『太平記』に描き出された武士像

〈貴族的〉色合いを帯びた武士、平重盛に代表される、『平家物語』の「忠臣孝子」像が、「諫言」の場において語られていたのに対し、『太平記』では、多くの場合、武士の本分である戦の場面で、実に多様な「忠」と「孝」で表

された武士の生々しい姿が描き出されている。

「二君に仕えず」、父子二代に亘って一貫した倫理を堅持して南朝側の天皇を支え続けた武士、「主」と運命を共にし、一心無きことを証明するため自害した武士、「主」の命の代りに討死した武士、父兄と対抗してまで「主」を裏切らない武士、北朝天皇の旅路の辛苦を思いやる武士などが、『太平記』には「忠臣」また「忠義」心ある武士として描き出されているのである。

そして、父の遺志を貫いてきた武士、亡父の後を追ってあの世での父への道連れとなるために討死した武士が、「忠臣孝子」として、『太平記』に描き出されるのである。

こうして、『太平記』には、これまで主として論じられてきた楠木父子に限らず、さまざまな武士の相異なる「主従関係」の中で、「主」に「忠」を尽くした武士の姿が、また、「君臣関係」と「父子関係」の統合の中で、「忠」と「孝」の両方を尽くした武士の姿が、描き出されているのである。

本稿冒頭に記したように、楠木父子は後に、「忠義」・「忠孝一致」(忠孝両全)を代表する武士像の原型、さらに「忠君愛国」の鑑として仰がれてきた。それはたしかに、『太平記』中の楠木父子に関わる「忠」、「忠」と「孝」の相矛盾しない現れ方の記述を起点として形作られたと言えるだろう。しかし他方、『太平記』には、後世の南朝正統観・「忠」の対象を天皇に限定する水戸学思想や、戦前・戦中の歴史政治的要請などとは関わり無い、「忠」、「忠孝」で語られた武士の姿が、楠木父子に代表される特定の武士以外にも多く見られたことは看過できないことである。また、『太平記』に「恩」という言葉が多出し、これまで思想的にあまり重要視されなかった、「報恩」する武士の姿も描き出されていること⁽⁴⁾も考え合わせると、歴史上、たえず語り直されることを通じて形成されてきた日本の「武士像」の解明において、『太平記』中の武士を語る「言葉」の分析が必要であることは言うまでもないであろう。

【注】

- (1) 本稿では、本文の引用は、慶長八年古活字本を底本とした、『新潮日本古典集成』(新潮社)所収の山下宏明校註・訳『太平記』(一、五)による。
 (2) 詳しくは、拙稿「軍記物語りに描かれた武士像―『平家物語』と『太平記』

における―」(広島大学大学院教育学研究科第二部(文化教育開発関連領域)第六十三号、二〇一四年、三二八―三三六頁)を参照されたい。

- (3) 例えば、「忠は万人の上に立つべし」(前掲『太平記』(一)、二二六頁)、「後の合戦のために命を全うしたらんこそ、忠義を存したる者なりけりと」(前掲『太平記』(二)、二八頁)、「多年の忠烈を失つて降人に出づる事あるべからず」(前掲『太平記』(三)、六〇頁)など。

- (4) 以上、加美弘「政治・軍学の書として読まれた『太平記』」(『国文学解釈と鑑賞』五六(八)、一九九一年八月、一一八―一二二頁)、同「『太平記』評価と受容の系譜―『太平記評判』から『私本太平記』まで」(『国文学解釈と教材の研究』三六(二)、一九九一年二月、一八―二三頁)を参照。

- (5) (1)「教材としての太平記(その一)―天皇制教育への形象化―」(『日本文学』三一(一)、一九八二年、九二―一〇二頁)、(2)「天皇制教育と正成像―『幼学綱要』を中心に―」(『日本文学』三九(一)、一九九〇年一月、一八―二六頁)、(3)「『太平記』受容の変遷―正成を中心に―」(シンポジウム、杉本圭三郎、他)、『言語と文芸』(二〇七)、一九九一年八月、五―五三頁)、

- (4)「『太平記』と小学唱歌―楠木父子を中心に―」(『国文学解釈と鑑賞』五六(八)、一九九一年八月、一四四―一四九頁)、(5)「天皇制教育と太平記―正成・正行像の軌跡―」(『日本文学』四五(三)、一九九六年三月、一三―二三頁)、(6)「天皇制下における歴史教育と太平記―正成・正行像の変容―」(『聖徳大学研究紀要人文学部』九、一九九八年、一三二―一四〇頁)、

- (7)「歴史唱歌と太平記―幼少の『脳髓ニ感覚セシメ』た忠孝の教え―」(『聖徳大学研究紀要人文学部』二二、二〇〇一年、一二八―一三四頁)。
 (8) 八木聖弥「『太平記』の世界の研究」思文閣出版、一九九九年、五四―七七頁、参照。

- (9) 森田貴之「『太平記』テクストの両義性―宣房・藤房の出処と四書受容をめぐって―」(『太平記』国際研究集会編『『太平記』をとらえる―第一巻』笠間書院、二〇一四年)。

- (10) 論文「『平家物語』における武士の「孝」と「忠」」(広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部(文化教育開発関連領域)第六二号 二〇一三年、三九六―四〇四頁)。
 (11) 本文の引用は、高野本(覚一別本)を底本とした、『新編日本古典文学全集』(小学館)所収の市古貞次校註・訳『平家物語』(一九九四年)による。

- (12) 以下「二」は、前掲論文(注⑧)の一部を、書き直したものである。
 (13) 前掲『平家物語』①、六六頁。
 前掲『平家物語』①、二二六―二二七頁。
 前掲『平家物語』①、二二七頁。

- (14) 儒教に言う孝とは、(一)祖先の祭祀(招魂儀礼)、(二)父母への敬愛、(三)子孫を生むことの三行を総括する内容であることが、加地伸行によって指摘されている(『儒教とは何か』中公新書、一九九〇年、一九頁、参照)。
- (15) 前掲『平家物語』①、一三七頁。
- (16) 前掲『平家物語』①、一三七頁、注一二を参照。
- (17) 平重盛の後白河院に対する態度について、『古文孝経』序に述べられている臣下の君主に対する無条件服従を「忠」とする『平家物語』作者の考え方によるとされる。『平家物語』の平重盛と『孝経』受容については、清宮剛「平重盛と『孝経』—日中君臣観比較の一例として—」(山形県立米沢女子短期大学紀要、二十九号、平成六年十二月)を参照されたい。
- (18) 前掲『平家物語』①、一三七頁。
- (19) 道端良秀『仏教と儒教倫理—中国仏教における孝の問題—平楽寺書店、一九六八年、二七〜二八頁、参照。
- (20) 前掲『平家物語』①、一四三頁。
- (21) 加地伸行・全校註『孝経』(講談社学術文庫、二〇一〇年)の中で、加地は『孝経』各章の特色を述べる際、『孝経』の第十五章「諫争」に対し、「この章は特異である。孝といえは、親が子に対して絶対的服従を強いるようなイメージがある。しかし、『孝経』はそうとはしない。親にも過ちがあることを認め、そうした不義に対して諫言すべきであることを説く。しかも親子間の問題だけとはしないで、天子・諸侯・大夫それぞれにおいてその臣は諫言すべきとする。士の場合は、友人が諫言をすべきとする。つまり、孝は人間関係において絶対服従というような単純な意味ではない事を主張している(一四二頁)と述べる。
- (22) 前文でも述べたように、平重盛に体现される「諫むる子」としての「孝子論」は、「父清盛を拘束して、政権の安定を図るべき」だとする近世の「孝子論」との違いについて、武田昌憲によって指摘されている(武田昌憲「平重盛『平家物語』の孝子説話」『アジア遊学 No.112』(特集アジアの孝子物語)所収)。
- (23) 引用は、本文は善本とされる宮内庁書陵部所蔵本(片仮名本)を底本とした、『新編日本古典文学全集』(小学館、一九九七年)所収の浅見和彦校註・訳『十訓抄』(二〇九頁)による。
- (24) 説話文学会「編」『説話文学研究』(三六)、三協社、二〇〇一年、一三五〜一四六頁。
- (25) 兵藤裕己『太平記(よみ)の可能性—歴史という物語—(講談社選書メチェ、一九九五年)、同「物語としての政治史—『太平記』を中心に—」(荻部直ほか編『日本思想史講座2—中世—』ぺりかん社、二〇一二年、所収)、参照。
- (26) 前掲『太平記』(三)、六〇頁。
- (27) 前掲『太平記』(二)、一六五頁。
- (28) 前掲『太平記』(三)、七五頁。
- (29) 前掲『太平記』(四)、一五六頁。
- (30) 前掲『太平記』(三)、九三頁。
- (31) 前掲『太平記』(二)、一一八頁。
- (32) 前掲『太平記』(二)、当該章段に対する校註者山下宏明の頭注、参照、一一〇頁。
- (33) 前掲『太平記』(三)、八一〜八二頁。
- (34) 兵藤裕己『太平記』(二)岩波文庫、二〇一四年、「解説2」を参照、五三七頁。また、同様の記述は兵藤裕己『王権と物語』(岩波書店、二〇一〇年「初出は一九八二年」、一一一〜一二二頁にも見られる)。
- (35) 前掲『太平記』(四)、四三五頁。
- (36) 前掲『太平記』(五)、三四頁。
- (37) 前掲『太平記』(二)、二七五頁。
- (38) 前掲『太平記』(一)、二七七頁。
- (39) 両作品における「孝」と「忠」の表出のされ方の相違は、後世に与える影響として、江戸末期に頼山陽が『日本外史』の中で、重盛は「忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず」と嘆いた、と書いたのが有名である。これは明らかに、『平家物語』の重盛の語り(注18)に見られる、「忠」と「孝」の矛盾した現れ方を踏まえた上での記述である。一方、『太平記』の正行の例に見られる「孝」と「忠」の矛盾無き現れ方は、戦時・戦中では、正行が「忠孝両全」のモデルとして語られ続けてきた(石毛慎一「忠孝一致における軍隊思想と教育思想—明治末期における中学漢文教材から—」(『軍事史学』(三七)四、二〇〇二年)。そして今回考察した、資忠の例からも、『太平記』中では、実際に「孝」と「忠」の矛盾が見られない。同じく「忠」と「孝」の両方で語られた両作品の武士像であるが、その現れ方の違いによって、「忠」と「孝」の両立を図るのに苦しむ『平家物語』の重盛より、『太平記』中の正行・資忠に見られる「忠」と「孝」の両立が成り立った物語の方が、江戸後期の水戸学を経て、さらに戦前・戦中における「忠君愛国」教育の中で、「忠孝一致」のモデルとしてより多くとり上げられる。実際に、政治的に、『太平記』が後世に与える影響は『平家物語』を遙かに越えることが、既に多くの研究者によって指摘されている。その要因の一つに、本稿で考察した両作品に見られる「孝」と「忠」の出現の仕方の違いにも重要な要素であろう。
- (40) 『太平記』に描き出された武士像—「恩」という言葉から—(現在、投稿、査読中)。

The Samurai Image in *Taiheiki*
— *Tyu and Kou* —

Yu Jun

Abstract: The research assignment deals with the question of how the samurai image was formed in Japan, particularly in Gunki monogatari (war tales) in the Middle Ages, with a focus on how samurai was described in a battle scenario. The purpose of this paper is to explore the image of samurai in *Taiheiki*. The most important aspect of samurai image in *Taiheiki* is its description using the word 忠 (*tyu*: loyalty) and 孝 (*kou*: filial piety). As we all know, Kusunoki Masashige has been considered as the most famous loyal retainer (忠臣). His son Kusunoki Masatsura is also well known because of his *tyu* and *kou*. Their unique image formed over a period of time not only how *Taiheiki* was perceived historically or politically, but also how it was described in *Taiheiki*. In the long periods of wars described in *Taiheiki*, several other kinds of samurai have been described by the words *tyu* and *kou*. However, not much research has been conducted on their contributions. This paper investigates how samurai acted when described by the words *tyu* and *kou* in battles. In addition, it presents a comparison with the case of another Gunki monogatari called *Heike Monogatari*. The comparison offers a suitable way of clarifying how different samurai image has been expressed in *Taiheiki*.

Key words: *Taiheiki*, Samurai image, *Tyu*, *Kou*

キーワード：太平記, 武士像, 忠, 孝